



Title	太宰治文学の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	唐, 雪
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13406号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Xue_Tang_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 唐 雪

主査 教授 中 村 三 春
審査委員 副査 准教授 水 溜 真由美
副査 教授 権 錫 永

学位論文題名

太 宰 治 文 学 の 研 究

・当該研究領域における本論文の研究成果

古典と近代、日本と海外を問わず既成の文芸作品を翻案・改作して自作を創作することの多かった太宰治の文学については、これまでも比較文学の方法に基づいて研究した論考が多数、世に問われている。ただし、それらの大半は太宰文学と特定の地域・作家・作品との関わりに偏っており、自ずから取り上げられる太宰作品も限定されたものであることがほとんどであった。その反省に鑑み、太宰文学の総体を追究しようとする本論文は、習作期から後期に至るまでの多数の太宰作品を対象とし、またマルクス主義、聖書・キリスト教、さらにイギリス・ドイツ・ロシア・中国など世界各地の文学・思想に源泉を求め、太宰文学における外国文学との関係を広くかつ総合的に取り上げることに重点を置いている。また他方では、破滅型・下降型のような作家像が先行する批評となることの多かった太宰文学の研究において、本論文はナラトロジーやメタフィクション論、日記体・書簡体・手記体などのドキュメント形式、引用や自作引用、セクシュアリティ論やジェンダー批評など、学界の研究動向の先端に位置づけられる多様な文学理論を援用し、比較文学的な方法と組み合わせて論述することにより、高度な水準の文芸テキスト研究として構築されている。

具体的には、(1) これまで研究が遅れていた習作期の諸作品に本格的な分析を加え、「無間奈落」からは女中小説の観点から女性嫌悪と女中思慕の両義性を読み取り、「地主一代」は〈信頼できない語り手〉としてその露悪的な物語を分析し、「学生群」については複眼的思考を可能とする多視点的構成から、イデオロギー的な善悪二元論を相対化する要素を見て取るなど、習作期の作品群を、マルクス主義の影響を独自に昇華して、同時代のプロレタリア文学とは異なる太宰的な文芸様式の基礎を形作ったものとして再評価した。(2) 聖書・キリスト教の影響の色濃い中期作品群については、「風の便り」『正義と微笑』『パンドラの匣』『トカトントン』における聖書の影響を本文に即して実証的に考察した上で、書簡体・日記体・新聞小説・独白体などの形式、農民文学・俳優願望・結核小説・脱線小説などのジャンルやテーマから精細に分析し、さらに、従来重視されてきた「マタイ伝福音書」など新約聖書のイエスから、むしろ「出エジプト記」のモーセなど旧約の世界への顕著な志向がこの時期の太宰に存在したことを初めて指摘した。(3) 中期から後期の主な小説作品、すなわち『新ハムレット』『お伽草紙』『惜別』『斜陽』については、シェイクスピア、日本古典、魯迅、チャーホフなどとの関係と、各々の小説構造に着目し、喜劇的精神やナンセンス性、メタフィクション（小説についての小説）、意識の流れの小説などの特徴を取り出し、特に『惜別』については新たに魯迅とキリスト教との関わりにも触れ、太宰固有の新たな魯迅像を創出した作品として再

評価した。これらのことが一定の説得力を伴って詳細に追究されていることから、本論文は太宰治文学研究の領域において、高い研究成果を上げたものと認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

このように本論文は比較文学研究の観点と多様なテキスト分析の手法とを組み合わせ、多数の太宰作品について多くの新見を提起した研究である。特に習作期の諸作品について初めて根本的な再評価を行い、聖書・キリスト教の影響について新約から旧約へという志向性を見出し、女中小説・脱線小説など新たなジャンル観を適用し、結論においては世界文学としての太宰文学の視野を提起するなどの点において、本審査委員会は本論文を高い水準にある研究として評価した。本論文によって、今もなお破滅型・下降型という紋切型で受け取られることの多い太宰の文学が、世界的な視野からの、また高度な文芸技術と様式を備えた芸術として改めて認識されることになる。

ただし、意欲的な研究だけに問題点も審査において指摘された。すなわち、(1) 論点が多岐に亙るあまり各章における論述の収斂点がやや明確でない場合が見受けられる点、(2) 太宰治研究における比較文学的研究の俯瞰的な概括が弱い点、(3) 「国民文学」「世界文学」等の術語に関わる歴史性について些か無頓着な点などである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の意欲的な研究姿勢と表裏をなすさらに高度な問いであり、本論文全体の達成度を損なうほどのものではない。それらは申請者が今後も引き続き太宰文学に関する研究を持続し、また論述方法上のいっそうの習熟度を獲得することにより、発展と解決の期待できる課題であると言える。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。